

次の文章は小林康夫／船曳建夫〔編〕の「知の技法」（東京大学出版会）の一部である。この文章を読んで以下の設問に答えなさい。

まず、いくらか迂回しつつ始めます。〈知〉は、あるいは〈学〉は、と言っても同じことですが、しばしば発見の^①がいねんとともに語られます。アルキメデスがその「原理」を発見した。^①【 】が万有引力の法則を発見した。ダーウィンが生物進化の法則を発見した。人々はそんなふうに関にするし、^②ひゃっかじてんや科学史の書物などもそんな書き方になっている。今まで知られていなかったことが、ないしものが、新たに見出されるのが発見です。見出されるといっても、それはひとりで人々の眼に明らかになったのではなく、ある傑出した精神の所有者が、〈知〉や〈学〉の営みによってあるときそれを見出したわけです。一人の個人ではなく複数の人々からなる集団だったりすることもあるかもしれませんが、とにかく、発見には、それを発見した「主体」が存在する。その「主体」はしばしば天才と呼ばれたりします。つまり、「ユーレカ（われ発見せり）！」と叫んで、感動のあまり裸のまま風呂から飛び出してきてしまう人間のイメージが、一つの新たな〈知〉が開示された瞬間をもっとも^③ゆうべんに語っているように思われるのです。ところで、発見とはいったい何か。

「発見する」という動詞を、英語では〈discover〉、フランス語では〈découvrir〉と言いますが、ご存じのようにこれはどちらも同じことで、「^②【 】い」を取り去るという意味になります。神秘のヴェールに^②【 】われて今まで人目に触れることのなかった何かがある。発見とは、人々の視線を遮っていたその「^②【 】い」を除去し、そのものを裸にして視線にさらすという身振りのことです。人間の精神の奥底に潜む無意識の存在とその構造は、フロイトによってそんなふうに関見されたのだし、近代化とともに忘れ去られようとしていた日本文化の民俗学的な古層は、柳田國男によってそんなふうにして発見されたのでした。〈知〉とは、遮蔽物を除去し、従来は光が当たっていなかった場所に光を当てる精神の働きのことだ、ととりあえず考えておいていいでしょう。〈知〉をめぐるこのイメージはそれなりに十分正当なものだと思います。

「学問」というやや古めかしい印象を与えがちな言葉を避けて、ここまで〈知〉とか〈学〉といった言葉を使ってきたわけですが、大学で行われているのはまさにこのことにほかなりません。わたしたちにとっての日々の実践は、単なる既成の、あるいは既存の知識の伝達ではなく、それまで「無知」の暗闇の奥処に沈みこみ、人々がその存在すら気づいていなかった何ものか、何ごとかを、明るいとこに引きずり出すという^④そうぞう的な行為でなければならない。これは愚直な正論のようですが、ここで改めて強調しておくに値するでしょう。ただ、もちろんこれは理想としてというか、最終的にめざす目的としてということであって、何かを発見するためにはまず、既存の知識の習得という基盤が必要なのは言うまでもないことですから、教室で過ごされる時間のかなりの部分が、やや単調で反復的な「伝達」「練習」「実験」等々に費やされるのは仕方ありません。また、^①【 】

とか柳田國男のような天才が今日の大学にそう何人もいるとは期待できないということも、残念ながら認めざるをえない。しかし、万有引力といった途方もない大発見はともかく、大なり小なり「ユーレカ！」の興奮を味わわせてくれるような契機は、いたるところに転がっているはずだ。

ところで、〈知〉の対象に、とくに制限があるわけではありません。「発見」しようと身構えている〈知〉的な視線は、どんなものにも向けられうる。むしろ、あらゆるものに向けられるべきなのが〈知〉の視線だと言うべきかもしれない。むしろそれは、わたしたちを取り巻いている今日の現実を構成するあらゆるものという意味ですが、そこでその対象が、一つの学問分野（ディシプリン）の〈知〉のパースペクティブによって捉えがたいものであれば、複数の学問分野を横断するような〈知〉の運動が要求されることになるのは当然でしょう。また、どの分野のルーティン化された方法も無効であれば、学問の分類の仕方そのものを組み換えて、一つの新たな〈知〉のシステムを④そうぞうすることを強いられる、ことになるかもしれません。

レトリック-Madonnaの発見, そしてその彼方 (松浦寿輝)

第1問 下線部①～④のひらがなを漢字で書きなさい。

- ① がいねん
- ② ひゃっかじてん
- ③ ゆうべん
- ④ そうぞう

第2問 【 】①と②を埋めなさい。①には人名、②は漢字一文字が入る。

第3問 文章全体を要約しなさい。(200字以内)

第4問 この文章の論点を踏まえて、あなたは本学でどのように学問に取り組んでいこうとしているのか、これまでの自己の経験をふまえてそれが可能であるという根拠を示しつつ述べなさい。(400字以内)